

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 17

小山ヶ谷古墳

小造山古墳群

2004年12月

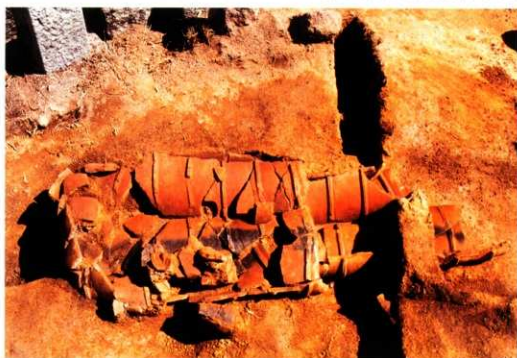
総社市教育委員会



1. 小山ヶ谷古墳出土埴輪棺(1)・(2)



2. 小山ヶ谷古墳埴輪棺検出状態(西から)



3. 小山ヶ谷古墳埴輪棺検出状態(北から)



(1) 小造山西古墳群調査区遠景 (西から)



(2) 小造山西古墳群調査区全景

序

岡山県は瀬戸内の温暖な気候から「晴れの国」と呼ばれ、その南部の中央に位置する総社市は古備高原の南縁にあたる豊かな自然環境と、岡山三大河川の一つ高梁川により育まれた肥沃な平野は古来より人々に安定した生活の場と数多い実りをもたらしてきました。

このように恵まれた気候風土の当地域は、「古代吉備文化」の中心地として繁栄し、それを物語るように先人達の足跡である全国的に著名な遺跡の宝庫として知られています。

このように多くの遺跡が存在する当市では、住民生活の向上と経済活動に伴う開発と国民共有の財産である埋蔵文化財の保護と調和について、従来より常に細心の注意と努力をもって対処してまいりましたし、今後ますますその重要性は高まると考えられます。

さらに、近年の国民の歴史に対する意識と関心の高まりを反映して、遺跡を歴史教育の場として活用することが求められており、総社市でも全国有数の古代山城である「鬼ノ城」の復元整備第一期工事を平成十七年の完成を目指して進めております。

本報告書には、墓地造成に伴い発掘調査を実施した小山ヶ谷古墳と、工場造成に伴い発掘調査を実施した小造山西古墳群の調査成果を収めています。

全国第九位の規模を誇る作山古墳に近い小山ヶ谷古墳からは、県内では例をみない特製埴輪棺が出土したほか、小造山西古墳群では県下第八位の規模の小造山古墳に寄り添うように密集した小規模群集墳の実態が明らかになりました。

両遺跡共に考古学上の貴重な調査例であり、本報告書が今後の文化財の保護と歴史研究の一助となることができれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたりまして御指導を頂きました諸先生方と岡山県教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに発掘調査に御協力を頂いた事業者の方々と、厳寒・酷暑のなか発掘調査に従事して頂いた作業員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成16年11月1日

総社市教育委員会

教育長 栗田 交三

例 言

1. この報告書は総社市教育委員会が平成9年度と平成13年度に発掘調査を実施した「小山ヶ谷古墳」と「小造山西古墳群」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は総社市教育委員会文化課文化財係職員武田恭彰が担当した。調査期間は小山ヶ谷古墳が平成9年8月8日～18日、小造山西古墳群が平成13年12月15日～25日である。
3. 本報告書の執筆・編集は武田が行い、遺物の復元は西平登代子、田中高子（埋蔵文化財学習の館）、遺物の実測・拓映は武田、田中、近藤雅子（埋蔵文化財学習の館）が行い、遺構・遺物のトレースを武田が行った。
4. 本報告書の高度値は海拔高であり、遺構図の方位は磁北である。
5. 本報告書に掲載した地図の内、第1図は国土地理院発行のものを複製し加筆したものである。
6. 出土した遺物と図面・写真等は埋蔵文化財学習の館において保管している。
7. 小造山西古墳群の発掘調査にあたっては、岡山大学文学部松木武彦先生より現地でご指導・ご助言を得た他、地形測量にあたり文化課職員松尾洋平と近藤雅子（埋蔵文化財学習の館）の助力を得た。

目 次

序 文

例 言

第 I 章 地理的歴史的環境 1

第 II 章 小山ヶ谷古墳の調査

第 1 節 調査にいたる経緯	4
第 2 節 調査の体制	4
第 3 節 発掘調査の概要	7
第 4 節 遺構・遺物	7
第 5 節 まとめ	15

第 III 章 小造山西古墳群の調査

第 1 節 調査にいたる経緯	17
第 2 節 調査の体制	18
第 3 節 発掘調査の概要	20
第 4 節 遺構・遺物	22
第 5 節 まとめ	33

目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (S = 1/40000) ……………	3	第15図	小造山西古墳群1号墳出土地輪 (S = 1/4) ……………	24
第2図	小山ケ谷古墳周辺遺跡配置図 (S = 1/5000) ……………	6	第16図	小造山西古墳群2号墳平面図 (S = 1/100) ……………	25
第3図	小山ケ谷古墳墳丘平面図 (S = 1/60) ……………	8	第17図	小造山西古墳群2号墳周溝内 遺物出土状態平面図 (S = 1/20) ……………	25
第4図	小山ケ谷古墳竪穴式石室平・断面図 (S = 1/30) ……………	9	第18図	小造山西古墳群2号墳周溝内出土遺物 (S = 1/4) ……………	25
第5図	小山ケ谷古墳墳輪輪平・断面図 (S = 1/30) ……………	9	第19図	小造山西古墳群1～4号墳墳丘断面図 (S = 1/40) ……………	27・28
第6図	小山ケ谷古墳墳丘・石室平・断面図 (S = 1/30) ……………	10	第20図	小造山西古墳群3号墳平面図 (S = 1/100) ……………	29
第7図	小山ケ谷古墳墳輪輪(1) (S = 1/6) ……………	11	第21図	小造山西古墳群3号墳周溝内 遺物出土状態平面図 (S = 1/20) ……………	29
第8図	小山ケ谷古墳墳輪輪(2) (S = 1/6) ……………	12	第22図	小造山西古墳群3号墳周溝内出土遺物 (S = 1/4, 1/2) ……………	29
第9図	作山古墳・折敷山古墳出土地輪 (S = 1/4) ……………	14	第23図	小造山西古墳群3号墳周溝内出土地輪 (S = 1/4) ……………	30
第10図	小造山西古墳群周辺遺跡配置図 (S = 1/10000) ……………	19	第24図	小造山西古墳群4号墳平面図 (S = 1/100) ……………	32
第11図	小造山西古墳群調査区位置図 (S = 1/3000) ……………	20	第25図	小造山西古墳群調査区内古墳配置図 (S = 1/300) ……………	33
第12図	小造山西古墳群配置図 (S = 1/200) ……………	21			
第13図	小造山西古墳群1号墳平面図 (S = 1/100) ……………	23			
第14図	小造山西古墳群1号墳主体部平・断面図 (S = 1/40) ……………	23			

巻頭カラー目次

巻頭カラー図版1

1. 小山ケ谷古墳出土地輪輪(1)・(2)
2. 小山ケ谷古墳墳輪輪検出状態(西から)
3. 小山ケ谷古墳墳輪輪検出状態(北から)

巻頭カラー図版2

- (1) 小造山西古墳群調査区遠景(西から)
- (2) 小造山西古墳群調査区全景

図 版 目 次

図版1	1. 小山ケ谷古墳調査前(南から) ……………	37			
	2. 小山ケ谷古墳竪穴式石室検出状態 ……	37	図版7	1. 小造山西4号墳周溝(西から) ……………	43
図版2	1. 小山ケ谷古墳全景(西から) ……………	38		2. 小造山西1号墳墳輪出土状態 (北から) ……………	43
	2. 小山ケ谷古墳全景(東から) ……………	38	図版8	1. 小造山西2号墳周溝内遺物出土状態 ……………	44
図版3	1. 小山ケ谷古墳墳輪輪(2)線刻 ……………	39		2. 小造山西3号墳周溝内遺物出土状態 ……………	44
	2. 小山ケ谷古墳墳輪輪(1)線刻 ……………	39	図版9	小造山西3号墳出土遺物 ……………	45
	3. 小山ケ谷古墳墳輪輪被覆粘土 ……………	39	図版10	小造山西2号墳出土遺物(1) ……………	46
図版4	1. 小造山西古墳群調査前(西から) ……………	40	図版11	小造山西2号墳出土遺物(2) ……………	47
	2. 小造山西2・3号墳検出状態 (西から) ……………	40			
図版5	1. 小造山西1号墳全景(西から) ……………	41			
	2. 小造山西1号墳主体部 ……………	41			
図版6	1. 小造山西2号墳全景(東から) ……………	42			

第1章 地理的歴史的環境

今回の発掘調査の対象となった小山ヶ谷古墳と小造山西古墳群は、いずれも総社平野の南端、山手村に接して位置する旧三須村地区に所在している。

この旧三須村地区には山手村との境界を東西に走る旧山陽道より北側に総社平野へ張り出すように独立した低丘陵があり、現在の集落はその裾部を取り巻くように立地している。

これらの低丘陵と吉備高原南端の急峻な山塊との間に広がる総社平野は、岡山三大河川の一つである高梁川の沖積作用により形成された平野である。その高梁川の現在の流路は総社市域から南流して倉敷市から水島灘に注いでいるが、本来は総社平野を東流して現在の足守川と合流して吉備津に注ぐ流路もあったとあったとみられ、現在の景観にも幾筋もの旧河道の痕跡を随所で明確に視認できる。

この旧河道により形成された自然堤防状の微高地上には、縄文時代晩期以降になり集落が営まれ始め、その後背湿地ではいち早く水田が経営されていたことが南溝手遺跡から出土した晩期の初段痕土器から推定されている。

弥生時代になり徐々に集落は拡大していったとみられるが、遺構の調査例から推定して微高地上だけでなく丘陵裾部にまで爆発的に住居が増加するのは弥生後期であり、微高地の安定化と生産基盤の飛躍的な拡大がその背景にあったことが想定される。

古墳時代には、前期の集落の様相はやや不明確であるが、平野を望む低丘陵上に前方後円墳を含む大小無数の古墳が築かれ始める点から、集落と生産基盤の拡大はさらに進行したことが予想される。

さらに中期には、平野部に隣接した小丘陵を利用して造山古墳(350m)、作山古墳(286m)、小造山古墳(142m)、宿山古墳(114m)といった大規模な前方後円墳が岡山市新庄地区から総社市三須村地区までの東西約3.5kmの間に集中して築造されており、県内でも傑出した古墳集中地域である。

古墳時代後期になると、この地域での前方後円墳の築造はこうもり塚古墳(100m)、江崎古墳(45m)を最後に終焉を迎えるが、その周辺には、いち早く導入された横穴式石室を主体部とした数百基の小規模古墳が、前段階とは立地をやや変えながら群集している。

また、古墳時代の当地域のもう一つの大きな特色として鉄(器)生産が挙げられる。

総社市内の鉄(器)生産関連の遺跡としては、5世紀段階では市域の東端の足守川流域に所在し、大量の鉄器と鍛冶具の副葬が知られる随庵古墳や、鉄挺・鉄滓・陶質土器が出土した住居址群の窪木薬師遺跡が著名である。

ただ、現時点で確認される当地域の鉄精錬の遺跡は、鬼ノ城の麓で発見された6世紀末葉の鉱石精錬炉が調査された千引ナクログ谷遺跡より時期的に逆上る遺跡は確認されていない。

この点では高梁川右岸の新本川流域に所在する大規模な鉄精錬遺跡として著名な第二団地遺跡群や、鉄鉱石焙焼炉や鍛冶工房集落が発見された砂子遺跡でも同様であり、やはり確実に6世紀末葉を逆上る鉄精錬遺跡は確認されていない。

また鉄(器)生産に関しては、文献の人名・地名から先ず朝鮮半島との関係で論じられることが多いが、新本川流域で実施された横穴遺跡・砂子遺跡等の大規模な集落の調査では、それを窺わせるような遺物・遺構は皆無であり、当時の朝鮮半島の鉄生産形態との相違等、検討を要する問題が多い。

また、この点を政治的背景でみると、吉備地域は6世紀中葉には大和の大王勢力下に組み込まれたと考えられており、分割した国造や県・屯倉の設置により、前段階の巨大古墳の築造にみられたよ

うな吉備勢力の解体・分断支配を行ったことが想定されている。

この解体・分断支配の目的の一つとして、大和の大王勢力による吉備の鉄資源の確保が挙げられている論旨が多いが、現時点の鉄精錬遺跡の拡大期とは時期的にギャップがあり、このことが鉄精錬遺跡の時期的な遡上を暗示するものか、若しくは他の可能性を示すものかは今後の検討課題である。

この時期に旧三須村域は、大王家の家政に直属する県として設置された川嶋県に属していたと考えられており、さらに隣接する山手村の末ノ奥窯で焼成された飛鳥期の瓦や、道金山窯の逆「官」印須恵器が大和に運ばれていることも、この地域が大和政権と関わりがあった可能性を示している。

そして、律令体制の成立過程で、壬申の乱（672年）の後に吉備は備前・備中・備後に分国され、大宝律令（701）以降に「郡」が設定されると、当地域は窪屋郡に属していたと考えられ、「郡殿」墨書土器が出土した三須河原（コウラ）遺跡一帯に郡衙が設置されていたとみられる。

また、律令体制成立期の当市域の特筆すべき遺跡として、総社平野を見下ろす吉備高原南端に位置し、その巨大な全貌が明らかになりつつある古代山城の鬼ノ城がある。

鬼ノ城については文献に記載がなく、その築城時期・目的については不明な点が多かったが、近年の発掘調査によりほぼ7世紀第4四半期を中心とする時期に築城されたことが明らかになり、その規模・構造からみて、当時の国際情勢を反映した国家的事業であったと考えられる。

この鬼ノ城眼下の賀陽（夜）郡に所在したことが記録に残る備中国府については、三次の確認調査を経た現在でもその位置は不明であるが、「コウ」の地名が多く残る服部地区と、市名の起りである総社宮を中心とする地域が有力な候補地と考えられている。

この他、宿香山古墳・こうもり塚古墳や江崎古墳に近接する旧三須村域の上林地区に、備中国分僧寺と国分尼寺が律令体制下の大路である旧山陽道に面して建立されており、律令期にもこの地域が政治的に重要な位置にあったことを示している。

平安期には鬼ノ城に隣接する新山寺が、都にも聞こえた著名な修行場として記録に残っており、出土する瓦にも都の意匠が窺える等、荘厳な山上伽藍が存在したことが推定される。

平安末期の源平争乱期には、備中の多くの武士が平家方につき活躍したことが記録に残っており、中でも市内の高梁川に井堰を築き、備中南部一帯を灌漑する「十二箇郷用水」を創設したといわれる妹尾兼康は平家方の有力武将として「平家物語」にその名を留めている。

南北朝の動乱期には、総社平野の南端にそびえる福山城を守る新田義貞軍と東上する足利直義軍との間に、湊川の合戦の前哨戦ともいふべき大規模な戦闘があり、備中国分寺もこの時に焼亡した。

室町時代には備中の守護は主として管領職を務める細川氏一門により踏襲され、守護代として庄氏と石川氏が備中松山に置かれた守護所で領国経営にあたった。

応仁の乱以降に守護の領国支配が緩むと、在地の国人層の自立化の動きが顕著となり、備中南部では庄氏や上野氏・石川氏が近隣の荘園を侵略して国人層を被官化し、大内氏や尼子氏の幕下として勢力拡大を図ったが、16世紀後半には安芸の毛利氏と結んで台頭した三村氏が備中の覇権を掌握した。この三村氏も強固な基盤を有する戦国大名とは成り得ず、西の毛利氏と備前の宇喜多氏の抗争、さらに織田信長麾下の羽柴秀吉の侵攻の戦乱の中で滅亡した。この結果、備中は高梁川を挟んで宇喜多氏と毛利氏に領有されて関が原の役をむかえ、戦役以降も全国でも稀なほど大名領・旗本領・天領に分割されて明治維新となった。

参考文献 「総社市史」通史編 総社市 1998



- | | | |
|-------------------|-------------|-----------------|
| 1. 三原奥田遺跡 | 11. 作山古蹟 | 21. 天鏡山古蹟 |
| 2. 三原河原遺跡 | 12. コウモリ塚古蹟 | 22. 三五山古蹟 |
| 3. 三原河原遺跡 (中興賢地区) | 13. 御寺山古蹟 | 23. 日笠遺跡 |
| 4. 美濃田遺跡 | 14. 道山古蹟 | 24. 稻寺南寺 |
| 5. 天源遺跡 | 15. 小道山古蹟 | 25. 鬼ノ城 |
| 6. 山津田遺跡 | 16. 緑山古蹟群 | 26. 千引カナクロ谷製鉄遺跡 |
| 7. 井手天原遺跡 | 17. 南中国分寺 | 27. 廻廻古蹟 |
| 8. 井手乳尾遺跡 | 18. 南中国分尾寺 | 28. 津守遺跡 |
| 9. 井手村松遺跡 | 19. 密木瀬川手遺跡 | 29. 倉ヶ取山古蹟 |
| 10. 江崎古蹟 | 20. 密木瀬川邊遺跡 | 30. 轟山古蹟群 |

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/40000)

第Ⅱ章 小山ヶ谷古墳の調査

第1節 調査にいたる経緯

岡山県南西部、吉備高原の南端に位置し古代吉備文化の中心地として知られる総社市域は、平野に伸びる浸食の進んだ低丘陵上に大小数多くの古墳が存在し、県下有数の古墳密集地帯となっている。特に岡山市西部から総社市南部にかけて広がる「吉備路風土記の丘」一帯には、全国第四位の規模の造山古墳（岡山市）、第九位の作山古墳（総社市）を始めとして小造山古墳、こうもり塚古墳（総社市）、宿寺山古墳（山手村）などの墳丘の全長が100mを越える大規模な古墳が集中している。

また第Ⅳ章で述べる小造山西古墳群で明らかになったように、これらの大古墳を取り巻く状態で未発見のものを含めて推定すると数百基の小古墳が存在すると考えられる。

今回の調査の対象となった小山ヶ谷古墳は、作山古墳の北側の標高20m程度のなだらかな独立した低丘陵に所在している。この低丘陵では近世以降に三須集落の墓地としての利用が拡大し、さらに市街地に近接した立地の好条件等から、昭和40年代に大規模な住宅団地が造成された他、虫食い状に小規模な開発が行われその景観は大きく変貌している。

ただ、これらの開発の大半は総社市教委に文化財専門職員が配置される以前であったため、消滅したであろう古墳群についてはまったく不明であり、僅かに近隣の住民がいくつかの古墳とおぼしき高まり・石棺から、工事中に鉄器や土器が大量に出土したことを記憶しているのみである。

近年、この丘陵の東裾の国道429号線沿いに「吉備路観光センター」が建設され、事前の発掘調査が行われたが、開発区域の斜面部から水田にかけては顕著な遺構は確認されていない。

小山ヶ谷古墳は低丘陵の東北端に位置し、現在の三須の集落を直下に望む北に突出した小尾根上に所在し、窪屋郡衙と推定される三須河原遺跡は約200m北に広がっている。

古墳が所在する一帯は近世以降に墓地として開発されていたため地形の変更が著しいが、僅かに残る墳丘は地元ではかなり以前から古墳として認識されていたらしく、林立する墓石の中に墳丘が嵩状に残されていた。

平成9年7月に、この墓地所有者から高まりを除去して墓地を拡張したいので古墳であるか否かを確認して欲しいとの依頼が教育委員会にあった。

このため同じ三須地区で発掘調査を行っていた担当者が現地へ赴き踏査したところ、埴輪片の散布がみられたため高まりは古墳であると判断し、開発を行う場合は発掘調査が必要である旨を所有者に伝えた。

その後、教育委員会では墓地所有者と古墳を保存する方向で協議を行ったが、所有者が現在の限られた敷地内で墓地を整理するしかない事情と、遺構の残存状況が非常に悪いことが予想される点を考慮し、やむを得ず発掘調査を実施し記録保存の処置をとることとなった。

第2節 調査の体制

発掘調査は総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導助言のもとに、平成9年8月8日～18日までの7日間実施した。

調査組織

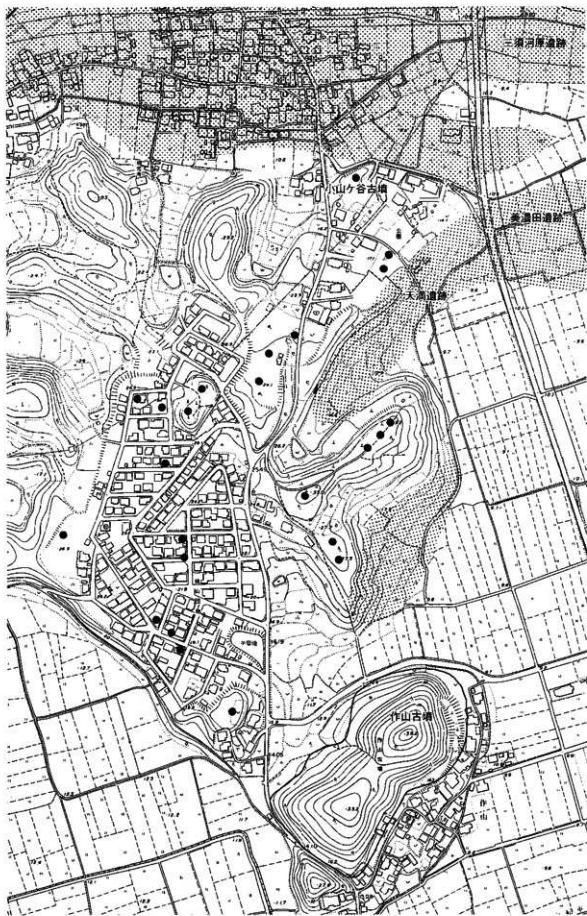
参事兼文化財室長 村上 幸雄
文化財長室長補佐 加藤 信二
主任 武田 恭彰 (調査担当)
主事 土家 慶子 (庶務)

発掘調査では下記の方々に真夏の酷暑の中、大変ご苦勞を頂いた。記して厚く感謝申し上げます。

作業員

岡 高志 林 純弘 松本和子 林 幸 (故) 林智恵子 光畑 都 難波節子

報告書の作成にあたり、小山ヶ谷古墳の埴輪棺について奈良文化財研究所高橋克壽氏、岡山県古代吉備文化財センター亀山行雄氏から資料の提供等や懇切丁寧な御ご教示を得た。記して厚く御礼申し上げます。



第2図 小山ヶ谷古墳周辺遺跡配置図 (S=1/5000)

第3節 発掘調査の概要

今回の発掘調査の対象となった小山ヶ谷古墳は、作山古墳の北側に広がる低い丘陵から北側に派生する小尾根の北端に位置し、眺望が開けた北側の眼下には、弥生～奈良時代の濃密な遺構の分布が確認された三須河原遺跡が所在する微高地が広がっている。

発掘調査着手時の古墳の状態は、林立する墓地の石塔群の中に辛うじて2×7m程度の範囲で高まりが残存する程度で、調査前には到底埋葬主体部等も遺存しているとは思えなかった。

発掘調査は人力で腐食土やゴミ等を除去することから開始したが、この段階で予想以上に遺存状態のよい竪穴式石室の石材の一部と、切断された墳丘断面に埴輪の一部を確認した。

このため残存する石室主軸を中心に土層断面を設定し、主軸とそれに直交してトレンチを掘り下げて石室と埴輪の検出を行った。この結果、僅かに残る墳丘の西側で周溝を確認した他、竪穴式石室の下層に埴輪棺が存在し、踏査時に採集した埴輪片はこの棺の一部であることが明らかになった。

本墳は遺存状況は悪かったが、竪穴式石室が墳丘の中心と仮定すると、形態は不明であるがその墳丘の規模は直径9m程度の小古墳であると考えられる。しかしながら、主体部が県内では調査例の少ない埴輪棺であるだけでなく、その埋葬状態をも把握でき、後に竪穴式石室が重複して築かれるという特異な古墳であることが判明した。

さらに埴輪棺に用いられた埴輪が、県内は元より近隣でも出土例がない天井を貼付した特製埴輪である点も非常に注目すべき調査例となった。

第4節 遺構・遺物

(1) 竪穴式石室

竪穴式石室（第4図）は、墓地の造成により東側の短辺と北側の側壁石材の大半を失っている他、内部も床面近くまで攪乱されており、腐食土を除去した段階ではほぼ遺存する石組を検出できた。

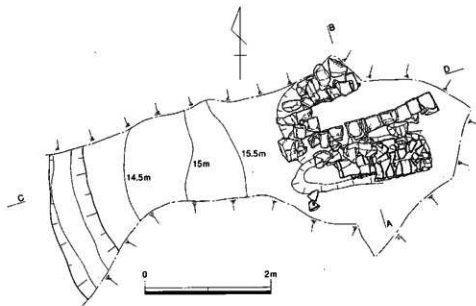
石室の石積みは長辺の側壁では3段目、短辺では2段目までが原位置を保っており、高さ30～40cm程度が遺存しているが、遺存状況から本来の高さを推定することはできない。

石室の内法は遺存する部分で長さ180cm、短辺で42cm、中央の最大幅で44cmを測り、比較的大きさの揃った花崗岩を、小口の平滑な面を内側に向けてほぼ垂直に積み上げている。

石室の墓壇は攪乱によりあまり明確に捉えられなかったが、僅かに残る西側短辺の部分から推定すれば、隅丸の長方形を呈するとみられる。

石室の石積みは、石室主軸に直交する土層断面（第6図）からみると、埴輪棺の封土を切って掘られた墓壇に直接据えられており、特別な整地層は認められず、床面も攪乱を受けているためか締められた面もみられず、細かい流入土が石組よりやや深い面まで堆積していた。遺存する床面と見られる面の標高は16.63mである。

この石室に伴う遺物は、攪乱土の中から須恵器の坏とみられる図示できない程の小片が出土したのみで、木棺の存在を窺わせるような痕跡も認められないが、石室の規模を勘案すれば木棺の存在を仮定しても差し支えないと思われる。



第3図 小山ヶ谷古墳墳丘平面図 (S=1/60)

(2) 埴輪棺

埴輪棺 (第5図) は石室の主軸に直交するトレンチでその存在が確認され、重複する竪穴式石室の調査後に石組の一部を除去して掘り下げ、その全体を検出した。

埴輪棺を覆う封土には特別な突き固めはみられないが、部分的に黄白色の粘土で被覆されている。埴輪棺の遺存状況は、西に天井部を向けた埴輪棺 (1) (第7図) の上半が擾乱を受けて破片が散乱していたが、他は土圧により圧壊しているものの、埋葬状況が把握できる良好な状態である。

埴輪棺には円筒埴輪に天井を付けた二個体の特製埴輪が用いられており、東に天井を向けた直径の大きい埴輪棺 (2) (第8図) に埴輪棺 (1) の脚部を差し込み、両端に天井を向けた状態で土壌に横たえられている。破片を復元した埴輪の高さは (1) が105.5cm、(2) が93cmであるが、差し込まれた (1) の脚部から推定して当初の埴輪棺の全長は約190cmと考えられる。

ただ、この墓塚の西端で僅かな骨片が検出されたが、その位置は推定される埴輪棺 (1) の天井の外にあたる点から、擾乱時に移動させられたものか、若しくは当初から破砕された埴輪片で囲むように遺骸を納めた可能性も考えられる。しかし、遺存する円筒のまま圧壊した (1) の破片の状態からみれば二次的に破片を並べた状態は認められず、擾乱による移動とみるのが妥当であろう。

埴輪棺が据えられた墓塚は遺存する部分から推定して長さ240cm、幅70cmの不整な長楕円形の平面形態を呈し、断面 (第5図) からみると底面は平坦であるが肩部は傾斜して掘り込まれている。

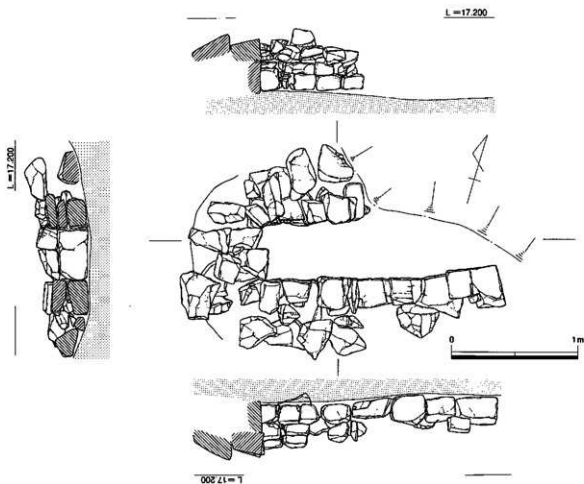
埴輪棺の中の土は、玉類を採集するために洗浄したが遺物はまったく出土しなかった。

(3) 墳丘・周溝

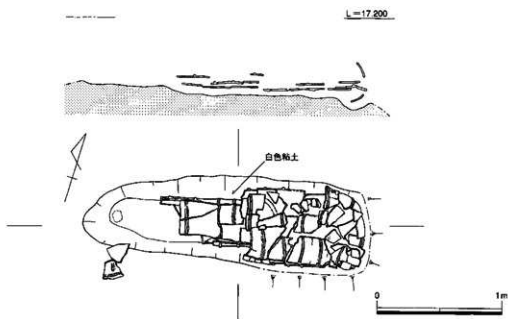
本墳の墳丘は面的にも遺存する部分が少なく、擾乱・流失のため盛土と周溝の関係がある程度良好に観察できるのは、竪穴式石室の主軸に設定したトレンチ断面 (第6図) のみである。

遺存する墳丘盛土は基本的には、埴輪棺が据えられた当初の段階のものが大半で、後に竪穴式石室が築造された段階で追加した盛土と明確に認定できる層はない。

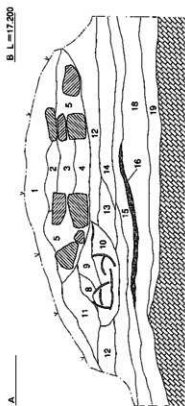
また、埴輪棺の埋納レベルと、墳丘端部に露出した地山の花崗岩風化土の傾斜・周溝の深さを勘案すれば、当初の盛土は現状とあまり変わらない程度の高さであったことが推測される。



第4図 小山ヶ谷古墳壛穴式石室平・断面図 (S=1/30)

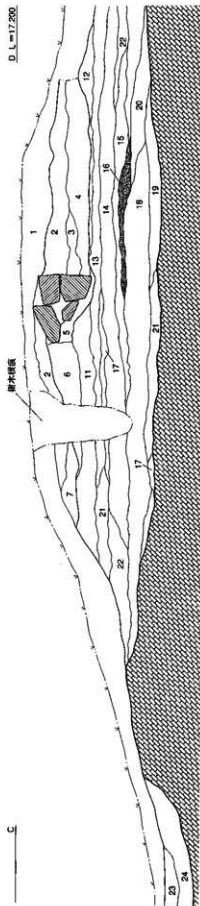


第5図 小山ヶ谷古墳壛輪棺平・断面図 (S=1/30)

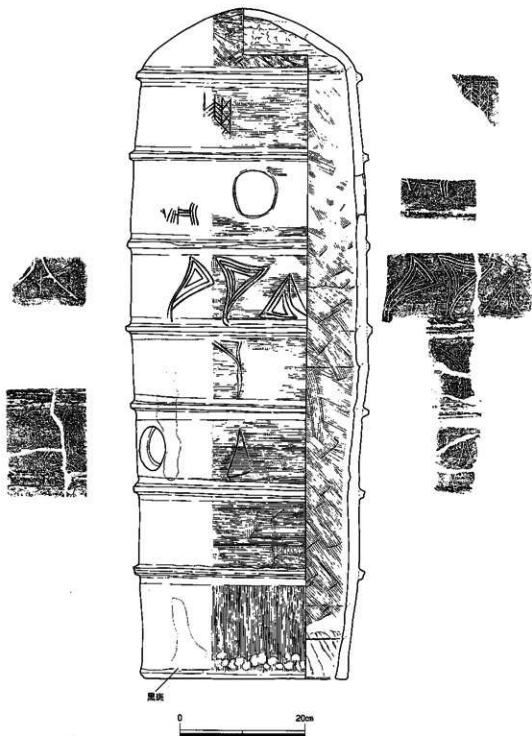


1. 厚石状斑じりの暗赤土 (暗赤)
2. 跡まりがなく深い暗赤土 (暗赤)
3. 跡まりがなく浅かい暗赤土 (暗赤)
4. 跡まりがない暗赤土 (暗赤)
5. 暗かい暗赤土 (暗赤)
6. 跡まった暗かい暗赤土
7. 跡まりのない灰褐色土 (5-7は第六式石塚に伴う暗赤土・壤土)
8. 跡まりのない暗赤土 (暗赤)
9. 跡まりのない暗赤土 (暗赤)
10. 暗かい暗赤土 (暗赤)
11. 暗かい暗赤土 (暗赤)
12. 暗かい暗赤土 (暗赤)
13. 暗かい暗赤土 (暗赤)
14. よく跡まった暗赤土
15. 跡まりのない暗赤土
16. 跡まりのない暗かい暗赤土、暗かい泥を多量含む
17. 跡まりのない暗赤土、暗かい泥を多量含む
18. さはく跡まりはなく深い暗赤土、暗赤土プロックを多量含む
19. 暗かい暗赤土、暗赤土プロックを多量含む

20. よく跡まった暗赤土、暗赤土プロックを少量含む
21. 暗赤土、暗赤土プロックを少量含む
22. 跡まりのある暗かい暗赤土、暗赤土プロックを少量含む (8-22は暗赤土)
23. 暗かい暗赤土
24. 暗かい暗赤土 (23-24は暗赤土)



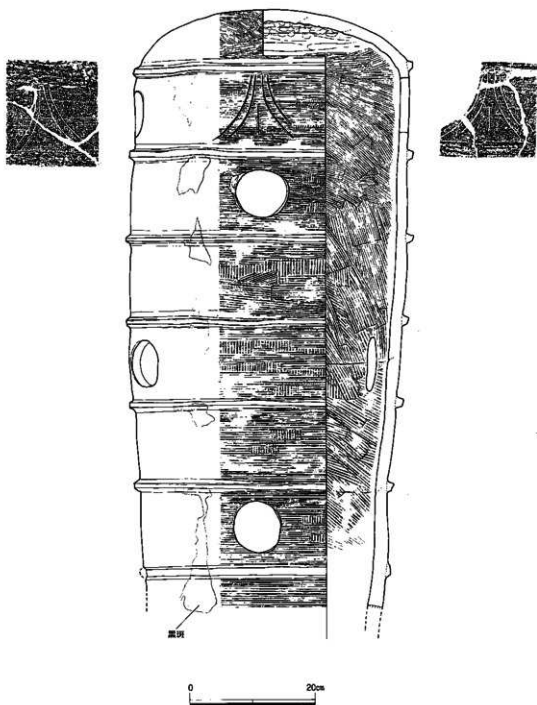
第6図 小山ヶ谷古墳群丘・石室平・断面図 (S=1/30)



第7図 小山ケ谷古墳埴輪棺(1) (S=1/6)

墳丘の築造状況は、緩やかな丘陵頂部をやや掘り窪めてから盛土を行っており、主として周溝を掘り上げた地山土混じりの細かい淡灰褐色～暗黄灰褐色土を、あまり固く締めることなく積み上げているが、盛土の途中に部分的にみられる細かい黒色土(炭層?)の意味は不明である。

周溝は地山に掘り込まれた肩部(第6図)を確認したが、大半は用地外のため正確な平面形態は窺知し得ないが、少なくとも幅2m以上の規模は想定できる。



第8図 小山ケ谷古墳埴輪棺(2) (S=1/6)

(3) 出土遺物

本墳から出土した遺物は、埴輪棺に使用された特製埴輪2個体のみである。

埴輪棺(1)(第7図)は埴輪棺(2)に差し込まれて圧壊した状態で出土したため下半の残存状態は良好であるが上半は攪乱のため流失した破片が多く、辛うじて1/3程度が残存していた。このため、特に上半の透かし孔の配置については図示した以上に存在したかは不明である。

埴輪は高さ105cm、筒部の最大径37.5cm、基底径32.5cmを測り、基底部の高さ15.5cm~16cm、7段に

巡らされたタガ間の幅は約10～12cm程度の間隔であり、遺存する部分では少なくとも3段目と6段目には直径7cmの透かし孔が穿けられていることが確認できるが、本来の位置と個数は断定できない。外面の調整は、一次調整の細かい板目の原体を使用した縦ハケの後に、基底部以外に縦ハケと同様の原体を用いて2周程度巡る丁寧な横ハケを施し、その後断面M字状の高さ1cm、幅2cmのタガを入念なヨコナデで貼付している。

内面の調整は基底部に斜め方向の押圧・指ナデ痕がみられるが、他は全て細かい斜め方向のハケを施しタガの裏面の横ナデや粘土帯の痕跡が入念に消されている。

また、脚端から約50cmの位置の明瞭な粘土接合痕跡を境として器壁断面の厚みが変化しており、全体の形状もこの部分からやや歪になることから、粘土帯の積み上げを一時休止した、もしくは半ば成形した2個体の筒部を接合した可能性が考えられ、内面のハケ調整はその後に施されたとみられる。

この埴輪棺の最も顕著な形態的特徴としては、最上段のタガを境としてドーム状の天蓋が付く点である。この天蓋部は外面は斜め方向の細かいハケが施されており内面には成形時の指頭圧痕跡がみられるが、接合部にはみ出した粘土を抉った横方向のヘラ削りが、この指頭圧痕跡と筒部の最終的なハケ調整を切っていることから、完成した筒部に成形した天蓋を接合して完成させたと考えられる。

この場合、最上段に透かし孔が存在していても6段目の孔から手を差し入れれば、その作業は十分可能であったと思われる。

筒部の3～7段目には線刻が施文されており、図示した面を正面とすると、遺存状態が悪い反対側の裏面にも同様の線刻文が認められるが、接合位置不明の破片を観察しても全周に巡る状態は想定出来ず、2方向のみの線刻と考えられる。

埴輪棺は淡黄～淡黄橙を呈し、筒部全体と基底部の2方向には焼成時の黒斑がみられる。胎土は1～2mm大の長石・石英粒を多く含むものの、埴輪棺(2)に比べると細かく焼成も軟質である。

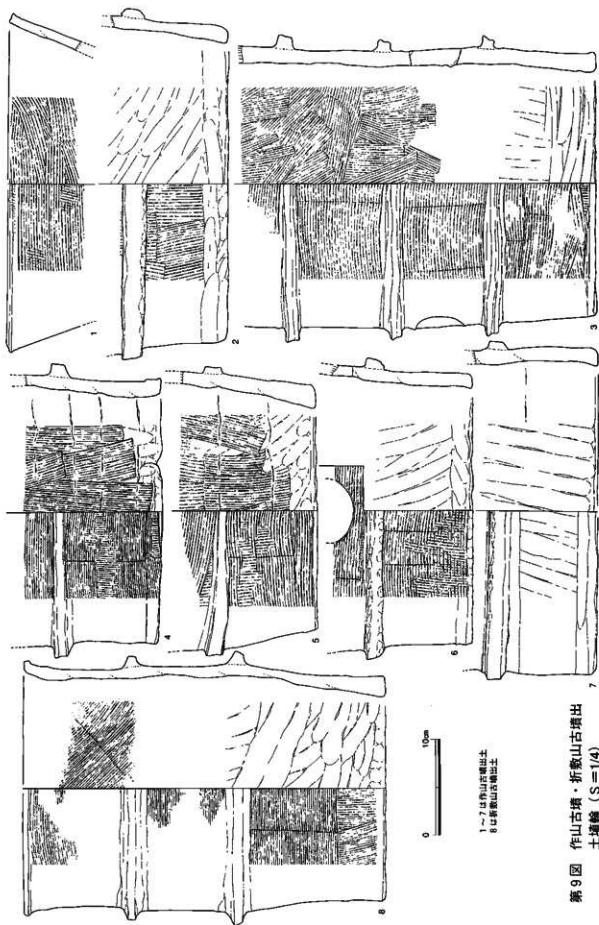
埴輪棺(2)(第8図)は埴輪棺(1)を差し込まれて圧壊した状態で出土したが、残存状態は良好でほぼ完形に復元できたが、基底部の破片がまったく存在しないことから、当初から人為的に打ち欠いた状態で埋納されたとみられる。

埴輪は残存する高さは93cmであるが、欠損する基底部を復元すると埴輪棺(1)とほぼ同じ高さであったと推定される。筒部の最大径は44cmを測り、7段に巡らされたタガ間の幅は約12cm程度の間隔でほぼ均等であり、2・4・6・7段目のほぼ対向する位置に直径7～7.5cmの一对の透かし孔が穿けられている。

外面の調整は、一次調整の埴輪棺(1)とは異なる荒い板目の原体を使用した入念な縦ハケの後に、縦ハケと同様の原体を用いて1～2周程度巡る丁寧な横ハケを施し、その後断面M字状の高さ1cm、幅2cmのタガを入念な横ナデで貼付している。

内面の調整は、全て細かい斜め方向のハケでタガの裏面の横ナデや粘土帯の痕跡が入念に消されているが、筒部の中程の粘土接合痕跡を境として器壁の厚みが微妙に変化することから、埴輪棺(1)と同様の成形状態が想定できるかもしれない。

この埴輪棺にも最上段のタガを境としてドーム状の天蓋が付くが、その形状は埴輪棺(1)に較べて扁平で、内面には成形時の指頭圧痕を消すように接合時の横方向の指ナデと筒部に連続する横方向のハケが施されており、ヘラ削りはみられない。このことから天蓋を接合した後に透かし孔から手を差し込んで最終的に筒部全体のハケ調整を行ったと判断され、二つの埴輪棺の成形・調整手順が細部



第9圖 作山古墳・折敷山古墳出土土層繪 (S=1/4)

で異なることを示している。

線刻は筒部の最上段の7段目にもみ施文されており、図示した面を正面とすると、対向する反対側の面にも同様の線刻文が認められ、「ハ」字状の中心に刻まれた縦線の有無のみが異なる。埴輪棺(2)は淡黄橙を呈し、筒部全体の対向する面には焼成時の細長い黒斑がみられる。胎土は1~2mm大の長石・石英粒を多く含むものの、埴輪棺(1)に比べると焼成は硬質である。

以上の二つの埴輪棺は、大きさや天蓋が付き7段のタガが付く等の形態的特徴はほぼ共通していることから、製作に当たっては同一の意匠が存在したとみられるが、胎土・焼成や細部の成形手順と調整には明確な差異が認められることから、異なる工人の製品であると考えるのが妥当であろう。

第5節 まとめ

以上ここまでの事実報告に基づき若干の考察を加えてまとめたい。

今回の調査では、本墳の墳丘の形態や規模の点は残存状態や調査範囲等の制約により明確に捉えることができなかったが、埋葬主体部については特製埴輪を使用した埴輪棺を埋めて竪穴式石室を構築した特異な状態が明らかになった。

この竪穴式石室の増設に伴う墳丘の改変は、墳丘の盛土の土層からは時期的な間断を窺わせる状態は認められないが、後述するように推定される埴輪棺の年代と、5世紀末葉と推定される竪穴式石室とは数十年間の時間的間断が想定される。石室増設時は当然ながら墳丘は明確に視認されていたはずであり、そこに墳丘を改変してまで石室を築造した意味は不明である。しかし、本墳が所在するこの丘陵は地形が殆ど旧状を留めていないが、本来はさらに多数の小規模な古墳が存在した可能性は高く、独立した低丘陵を限られた墓域として使用し続けるためには当然の行為であったとも考えられる。

次に埴輪棺に使用された特製埴輪について触れてみたい。

本墳のように主体部に埴輪が使用された古墳の被葬者については、埴輪製作集団が想定される場合が多く、この場合、本墳が前述したように作山古墳から直線で600mの距離にあり、数万本の円筒埴輪を使用した巨大古墳の埴輪製作集団との関係は当然ながら想定される。

この点について先ず作山古墳出土の埴輪と比較してみたい。作山古墳出土の埴輪については、先学による多くの研究成果があるが、研究者によって見解や観察結果に相違があるのが現状である。

これは正式な調査例が未だないため限定的な各個採集した資料しか見できないことに因ると思われるが、膨大な量の埴輪を製作した複数の製作集団の製品に言及するのは容易ではなく、本稿では総社市教委が所蔵する出土品(第9図)で若干の比較検討を行いたい。

図示した埴輪は全て円筒埴輪で、墳丘端部付近の立会調査等で出土したもの一部である。埴輪は全体が遺存する個体がないため高さは不明であるが、底径は25~32cm、基底部の高さは9~10cmでほぼ一定である。基底部外面の調整は一次調整の荒い縦ハケの個体とナデのみの個体があるが、タガは全て縦ハケと縦方向のナデの後に貼付し、その後タガの横ナデを切るように静止しながら一周する横ハケを施している。

タガに加えられた横ナデはさほど丁寧なものではなく、タガ自体にも横ハケが及ぶ点から、タガの横ナデを省略しタガ自体と筒部の滑らかな円弧の表現を一度の作業工程で行ったと思われる。また、(2)のように横ハケも省略し、指頭庄のみで粘土紐を貼付した低いタガの状態調整を終了している個体もある。

図示した個体の胎土は長石や石英粒を多く含むが総じて細かく、窑窯で焼成されたとされる硬質の焼成のものが大半であり、何れの個体にも黒斑は認められない。

以上の資料の特徴の内、製作工程の省略とも取れるタガ貼付後の横ハケ調整については、横ハケ省略直前の資料が本書に収録した小造山古墳群から出土しているが、作山古墳のような巨大古墳と小規模な群集墳の埴輪製作集団を調整技法のみで同じ系譜上に論じるのは妥当とは思われない。

この点については、膨大な数量の埴輪を製作する必要があった作山古墳の埴輪製作集団内の限定的現象なのか、製作工程の簡略化という当地域内での埴輪の期的な変遷上で理解すべきかは、さらなる多くの資料の検討が必要であろうと思われる。

この埴輪については、作山古墳の築造年代が避けて通れない問題であり、埴輪以外の墳丘の規模・形態と諸施設等、検討要素も多々存在するため、浅学な筆者が本稿の中だけで到底言及できるわけもなく、事例の一端を報告するのみに留めておきたい。

ここまで述べた作山古墳出土の埴輪と本墳の埴輪棺の特徴を比較すると、ハケ調整やタガの形状、焼成の点で明らかに本墳の埴輪棺は作山古墳の埴輪よりある程度の時期幅を考慮すべき古相を呈すると考えられ、本墳の埴輪棺の被葬者は作山古墳が築造される以前の埴輪製作工人と推定される。

現時点の知見では近接する地域に、本墳の埴輪棺と同じ特徴の埴輪の出土は確認しておらず、この製作集団の性格と供給先は不明であるが、東に約4.5km離れた前池内8号墳⁽¹⁾と雨崎天神山6号墳から出土した埴輪棺と高さや形態は異なるものの、その胎土・焼成・調整と線刻は酷似している。

前池内8号墳と雨崎天神山6号墳の埴輪棺については、その特徴から約2km西に位置する全国第4位の規模を誇る造山古墳と同時期の5世紀前半と考えられており、その被葬者は造山古墳の埴輪製作にあたった工人と推定されている。このことから、本墳の初築年代も同時期に比定されると考えられ、この位置付けは本墳の埴輪棺が作山古墳の埴輪より古相を呈する点とも矛盾しない。

備中南部の埴輪棺は、足守川流域から高梁川東岸域で造山古墳から作山古墳にかけての低丘陵に分布し、その大部分が古墳時代中期の所産である点から、巨大古墳の造営を契機として埴輪工人組織の再編成・拡充がなされた可能性が指摘されて⁽²⁾おり、本墳の被葬者像もその趨勢のなかで理解したい。

註

- (1) 「前池内遺跡」「山陽自動車道建設に伴う発掘調査8」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 岡山県教育委員会 1994
- (2) 「雨崎天神山遺跡」「山陽自動車道建設に伴う発掘調査8」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 岡山県教育委員会
- (3) 宇重 匡雅「雨崎天神山古墳群について」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 岡山県教育委員会 1994

第三章 小造山西古墳群の調査

第1節 調査にいたる経緯

今回の調査の対象となった小造山西古墳群は、市域の東南端に位置する三須丘陵に所在する。

三須丘陵は現在の行政区域では、岡山市に伸びる部分もあるが大半は総社市域に含まれ、南に隣接する山手村の福山山塊からはほぼ独立した標高30～40m前後の低丘陵である。

この三須丘陵とその周辺には造山古墳、作山古墳、こうもり塚古墳や備中国分僧寺・国分尼寺をはじめとして全国的に著名な遺跡が多く、「吉備路風土記の丘県立自然公園」の中心として県民はもとより県外からも多くの観光客が訪れている。

しかしこの低丘陵は、山陽自動車道や岡山自動車道のインターチェンジに近接する地理的な条件や、開発が容易な地形と基盤土が良質の真砂土（花崗岩風化土）である点等を反映し、小規模な工場団地や土取り等の開発が早い段階から進行しており、急速に往時の姿を変えつつあるのが現状である。

今回の調査の原因となった開発は、当該地一帯で平成2年度に造成された工業団地で操業を開始した精密機械工場が、業務の拡大により敷地の拡張を計画したものである

この平成2年度の工業団地の開発にあたって総社市教委は、対象地に県下最大級の方墳である折敷山古墳や県下第8位の規模の小造山古墳が存在するほか、大小の古墳が存在することから事業者と遺跡の保存について協議した。この結果、折敷山古墳をはじめとして大半の古墳を保存することで合意し、尾根上で発見された小規模な弥生期の集落跡（折敷山遺跡）と、小型の方墳の雲上山11号墳のみについて記録保存として発掘調査を実施した。（註-1）

平成13年12月に、この工業団地の南東隅の区画で操業する（株）小川製作所より、事業を拡大するため岡山市との境界まで工場用地を拡張するにあたり埋蔵文化財の有無についての照会があった。

このため、現地に赴き樹木を伐採後の現状を観察したが、古墳の高まり等は認められなかった。

しかし、平成2年度の調査を再検討したところ、この調査時には対象地内のほぼ全域に重機による確認調査を実施したことが報告書には記されているが、当時の調査担当者に聞くと、今回の調査対象の小造山古墳の西側斜面一帯については、古墳の高まりが視認できなかったためトレンチ設定の対象としなかったとのことであった。

このことから、前回の調査時に未確認の区域である点と、小造山古墳に近接する緩斜面であることを考慮して、試掘調査の必要があることを事業者に伝えた。

試掘調査は12月10日に重機を用いて長さ10mのトレンチを掘り下げたが、腐食土を取り除いた段階で埴輪片が出土し、古墳の周溝らしい落ち込みが断面で確認されたため、拡張対象地内に少なくとも1基の古墳の存在は確実となった。この結果を受け、市教委では事業者と協議を行い開発を行う場合には事前の発掘調査が必要であることを伝えた。

しかし、事業者は当該地周辺は前回の開発時の結果から、埋蔵文化財が存在しないという点を重視して用地を買収したのであり、それを今の段階でやはり遺跡が存在するので調査が必要とされるのは行政の指導としては矛盾があるのではないかと指摘した。また、事業計画の日程を考慮すれば、12月中の着工は絶対に変更できないとのことであった。

この事業者の指摘は非常に正当なものであり、埋蔵文化財の有無の判断の難しさを勘案しても、当

時の調査担当者並びに最終的には市教委の認識と判断の間違いが、このような事態を引き起こした点は明らかである。しかしながら、現実に遺跡が確認された以上、開発側の事情は十分理解できるものの、記録保存の処置なしで開発に着手することは難しことを説明すると共に、工事日程に支障のない期間で発掘調査を行いたい旨と発掘経費の負担についての理解・協力をお願いした。

以上の点について協議を重ねた結果、事業者が総社の歴史と埋蔵文化財に深い理解を有していたこともあり、発掘調査と経費の負担についての了解を得ることができ、ただちに調査に着手することとなった。

第2節 調査の体制

発掘調査は総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに平成13年（2001年）12月15日～25日までの11日間実施した。

調査組織

文化課長 加藤信二
文化財係長 谷山雅彦
主 任 武田恭彰（調査担当）
主 事 笹田健一（庶務）

発掘調査は厳寒の中、下記の方々に大変ご苦勞を頂いた。記して厚く感謝申し上げます。

発掘調査作業員

白神武夫 岡野隆志 矢吹守男 高杉 晶 角田忠久 黒江たか子 白神貞子
黒江登代子 赤城るみ子

報告書の作成にあたっては、ノートルダム清心女子大学教授葛原克人先生に懇切丁寧な御教示を得た。記して厚く感謝申し上げます。

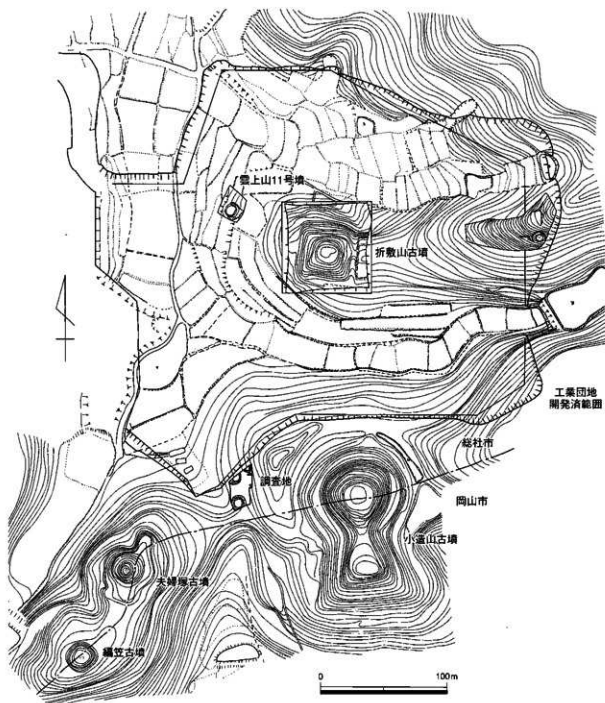
また、事業者である（株）小川製作所には発掘経費の負担の他に調査中も各種便宜を計って頂いた。改めて厚く感謝申し上げます。

註

(1) 前角和夫「折敷山遺跡・雲上山11号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10 総社市教育委員会 1993



第10圖 小造山西古墳群周辺遺跡配置圖 (S=1/10000)



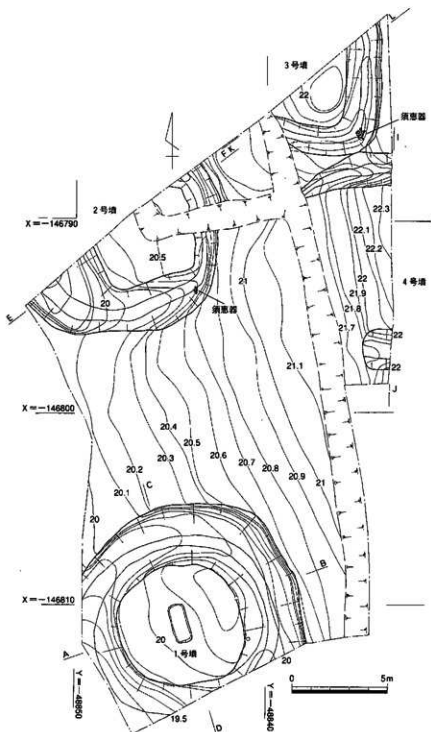
第11図 小造山西古墳群調査区位置図 (S=1/3000)

第3節 発掘調査の概要

今回の調査の対象となった小造山西古墳群は、三須丘陵の東端近くの岡山市との境界近くに位置し、県下第8位の墳丘規模を誇る小造山古墳が築造されたなだらかな丘陵の西側斜面に所在する。

調査前の状況は松を主体とした雑木林であったが、戦後のある時期まで小造山古墳の墳丘裾周辺までには果樹園が営まれていたようで、随所に開墾された段状の平坦面や水路が残っている。

発掘調査は重機を用いて腐食土を除去した後に、トレンチの周辺から人力で木の株と根の切除をしながら精査の範囲を広げ、試掘調査時の古墳（1号墳）の周溝を平面的に検出した。



第12図 小造山西古墳群配置図 (S=1/200)

次に平成2年の工場造成で切断された斜面の法面を精査したところ、三箇所古墳の周溝とみられる溝の断面が階段状に並んで確認され、墳丘の半分を削り取られた2基の古墳(2・3号墳)を確認した。また、段状に削平された調査区の上端の平坦面に3号墳に接するように周溝(4号墳)が検出され、調査区内に4基の古墳が存在することが明らかになった。

古墳の遺存状況は開墾による削平で1号墳以外は大半の墳丘盛土を消失しており、周溝のみでその規模を推し測るしかないが、2・3号墳の周溝内からはまとまった量の埴輪と須恵器が出土した。

古墳群が立地する緩斜面は、下降する1・2号墳の西端からの旧地形が谷状の低湿地であったものを近世以降に造成したことが試掘調査で判明していたが、調査期間を考慮して全面的に旧地形を復元

することはせず、古墳の調査後に地形測量とラジコンヘリによる空撮を行い調査を終了した。

第4節 遺構・遺物

(1) 1号墳 (第13図)

1号墳は調査区の南端に位置し、本墳だけは他の古墳と周溝を接していない。南側と西側の周溝の一部は調査区外に伸びているが墳丘はほぼ全体を検出でき、平面形態は直径9.5mの円墳である。

周溝・墳丘トレンチ断面(第19図)によると、周溝は幅ほぼ3mで全周するとみられ、遺存する深さは山側で約50cm、北側と南側で約40cmである。

本墳は他の3古墳とは異なり、地山の花崗岩風化土の斜面をやや掘り窪めて墳丘が築造されているため、削平を免れた墳丘盛土が30~40cm以上残存しており、墳丘の中央には地形の傾斜に平行する形で北北西に主軸をとる埋葬主体部が検出された。

埋葬主体部(第14図)の平面的な検出では、主体部埋土と墳丘盛土との識別が非常に困難であったため、墳丘に設定したトレンチ断面を入念に精査し、辛うじてその存在が明らかになった。

埋葬主体部は地山を底面にして掘り込まれており、その規模は深さ30cm、短辺75~85cm×225cmの隅丸長方形を呈しているが、土層断面からは明確な木棺の痕跡はみられない。

墳丘の盛土は前述のように、地山の花崗岩風化土を掘り窪め、周溝の掘削土を盛り上げているため旧地表面は確認できないが、盛土は周溝の埋土に較べて細かく締まっており識別は容易であった。

墳丘の山側裾部では2本の円筒埴輪(第15図1・2)が検出されたが、埴輪が埋め込まれた土層には埴輪の堀方が観察される点から墳丘から流れ落ちた盛土ではなく、地山に穿孔することなく埴輪を立てるために追加された盛土と考えられ、2本の埴輪は原位置の可能性が高い。

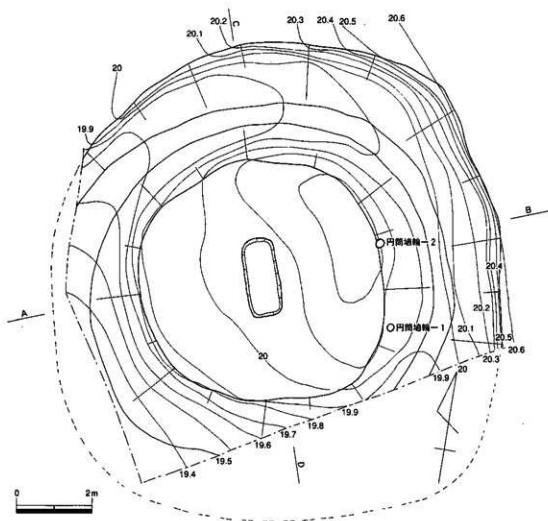
この他に周溝内からは円筒埴輪の小片と、形象埴輪(第15図3~7)の小片が出土しており、周囲の状況を勘案すれば、いずれも本墳に伴うもので墳丘上に掘えられたものが転落したとみられる。

本墳に伴う遺物は上記の埴輪のみで須恵器は伴わず、埋葬主体部の埋土を洗浄したが他に遺物の出土はなかった。

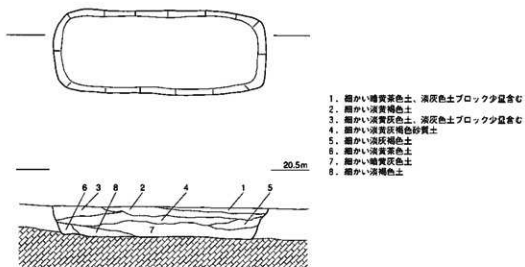
円筒埴輪(第15図1・2)は、果樹園の開墾等による削平を免れた基底部のみが残存している。

(1)は軟質の焼成で底径は16cm、外面は斜め方向の荒いハケ調整の後に単に粘土紐を貼り付けただけのような偏平なタガが巡っておりタタキの痕跡は認められない。内面は上半はナデで下端まで強いユビナデ痕跡が残る。(2)もやはり軟質の焼成で、底径15.5cmであるが成形時の変形が著しく、風化のため調整は不明である。

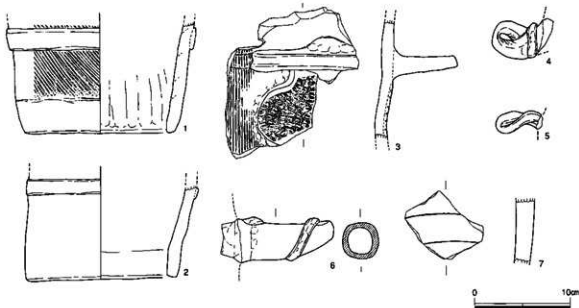
形象埴輪は全て周溝の埋土中から出土しており、(3)は小片のため全体の器形は不明であるが、円筒埴輪と同様のタテ方向のハケ調整の後に底状のツバと薄い円盤が指頭圧で貼り付けられており、円盤には串状の工具でつけられた多数の刺突痕跡がある。この刺突痕跡には他の部品を接合した痕跡が無いため何らかの意匠表現とみられる。(4・5)は粘土紐を撰ったもので、人物埴輪の衣装の紐、若しくは結った髪を表現したものと考えられる。(6)はやや先細りになる先端を塞いだ中空の棒に細い粘土紐を巻き付けており、基部に本体に差し込んだ痕跡があるが如何なるものを表現したかは不明である。(7)も全体の器形は不明であるが、二条の沈線が描かれており、内外面とも丁寧なナデである点から形象埴輪の一部と判断した。



第13図 小造山西古墳群1号墳平面図 (S=1/100)



第14図 小造山西古墳群1号墳主体部平・断面図 (S=1/40)



第15図 小造山西古墳群1号墳出土埴輪 (S=1/4)

(2) 2号墳 (第16図)

2号墳は調査区の西端に位置し、工業団地用地の造成時に全体の半分弱が未調査のまま消滅している。古墳の存在は用地法面に周溝が辛うじて確認されるまで認識できない程、墳丘が開墾により削平されている。地山に陥り込まれた部分が遺存する周溝の内側の墳丘基部は、盛土の大半が流失し腐食土を除去した段階で地山の花崗岩風化土面が露出し、埋葬主体部は消失したとみられる。

遺存する部分から推定される古墳の規模と形態は、南北辺6m×東西辺7mの方墳と考えられるが、山側と較べて谷側の墳丘裾部の地山整形はあまり明確な方形を呈していない。

遺存する古墳の周溝の幅は山側で1~1.5m、谷側で3.5mを測り、深さ1.2m程度が遺存している。周溝の埋土は墳丘から流れ落ちた細かい暗黄灰褐色土であり、底面近くは粘土化している。

周溝の埋土中には埴輪片は含まれず、南東隅の底面で須恵器 (第18図) がまとまって出土した他、墳丘上に置かれたとみられる2固体分の須恵器壺片が少量出土した。

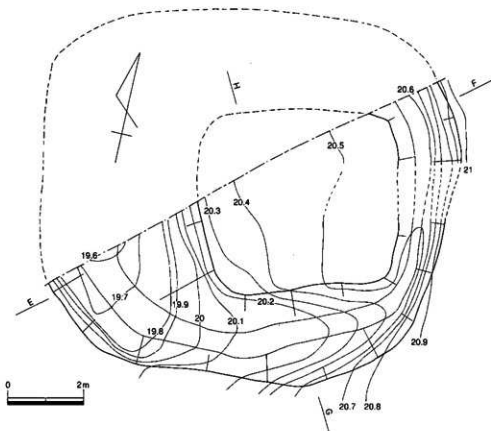
周溝底面の須恵器の内、壺は立てられた状態であるが、坏は意図的に蓋と身が重ねられたり壺を支えるように伏せられた状態で出土した。

須恵器 (第18図) は坏蓋 (8・9)、坏身 (10・11)、壺 (12)、が固まって出土した他、甕 (13・14) が周溝埋土中から出土している。

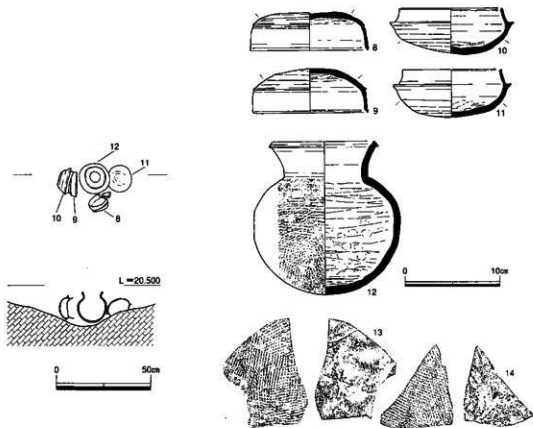
坏蓋 (8) は口径12.5cm、器高4.1cm、(9) は口径12.2cm、器高4.6cmを測り、天井部外面には自然釉が掛かりピンクに変色している。坏身 (10) は口径10.8cm、器高5.0cm、(11) は口径10.7cm、器高5.0cmを測り、いずれも内面底部に強くナデを加えて仕上げている点と、胎土に薄墨状に流れる黑色溶解物を含むことが共通しており、焼成はやや異なるが同時に製作された可能性が高い。ただ、坏蓋は2点とも胎土・焼成や器高の点で坏身とは異なっており、蓋と身は同時に焼成されたものではなく、消費地で組み合わせられて埋葬されたと考えられる。

壺 (12) は押圧と横ナデで大まかな器形を成形し、体部下半に内面無文当て具、外面平行叩きを加えているが、大型の甕のような器形を丸く叩き出すのではなく、器壁を締める程度の叩きである。

甕 (13・14) は外面の平行叩きはそのままであるが、内面の無文の当て具痕跡はナデ消している。

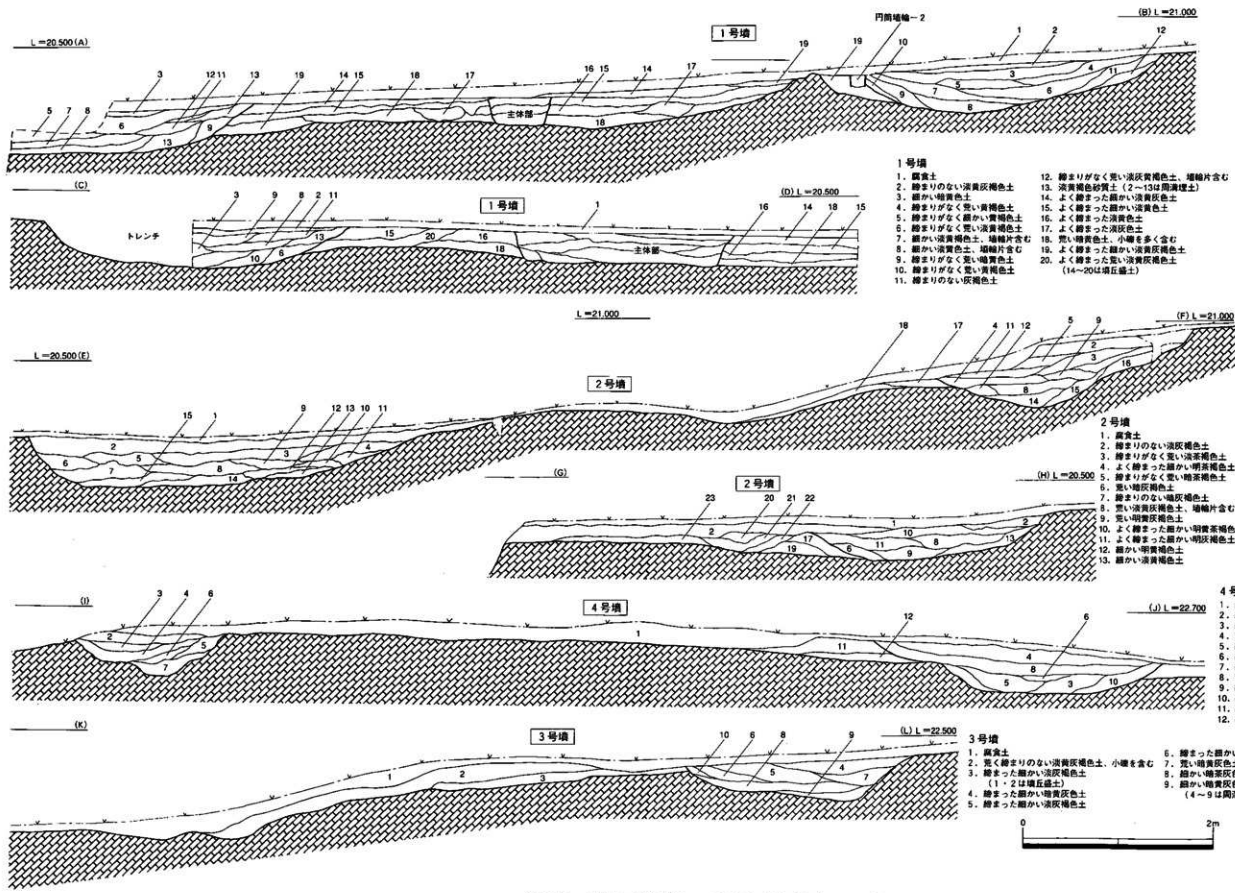


第16图 小造山西古墳群2号墳平面図 (S=1/100)

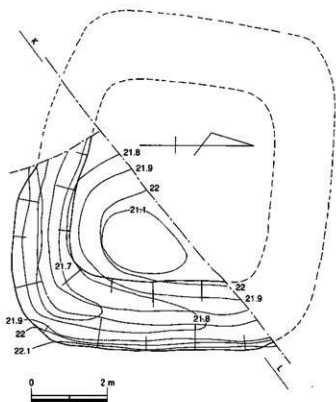


第17图 小造山西古墳群2号墳周溝内遺物出土状態平面図 (S=1/20)

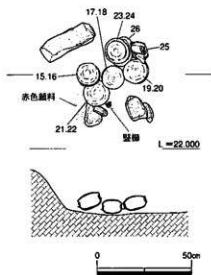
第18图 小造山西古墳群2号墳周溝内出土遺物 (S=1/4)



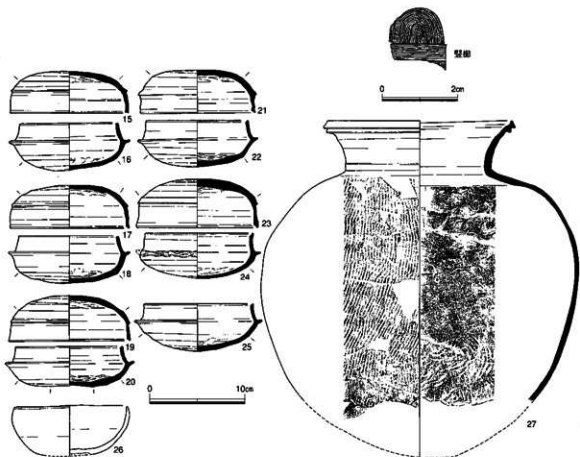
第19図 小造山西古墳群1~4号墳丘断面図 (S=1/40)



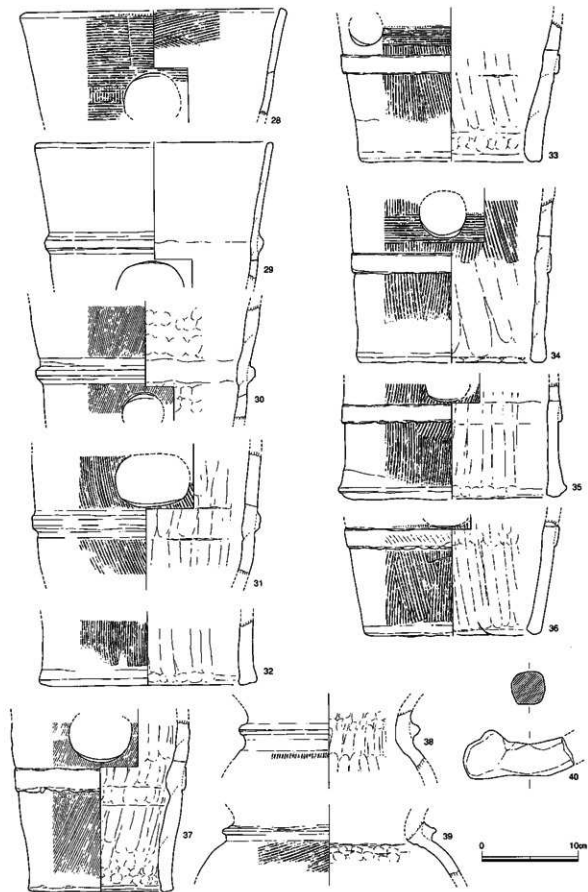
第20图 小造山西古墳群3号墳平面図 (S=1/100)



第21图 小造山西古墳群3号墳周溝内遺物出土状態平面図 (S=1/20)



第22图 小造山西古墳群3号墳周溝内出土遺物 (S=1/4、1/2)



第23图 小造山西古墳群3号墳周溝内出土埴輪 (S=1/4)

(3) 3号墳 (第20図)

3号墳は調査区の北端に位置し、工業団地用地の造成時に全体の半分以上が未調査のまま消滅している。調査前の古墳は墳丘の高まりは全く認められず、その存在は2号墳と同様に、用地法面での周溝の確認により初めて認知されたものである。

本墳の遺存状態は非常に悪く、2号墳と同様に大半の墳丘盛土が流失しているうえに削平による消失で埋葬主体部は確認できなかった。

地山に掘り込まれて遺存する周溝から推定される古墳の規模と形態は、南北辺6m×東西辺7mの方墳と考えられ、2号墳とほぼ同規模である。

周溝は遺存する部分でみる限り、肩部も墳丘裾部の整形に合わせるように直線的に掘り込まれている。山側と谷側の周溝底面比高差は約40cmで、2号墳の90cmに較べるとやや緩やかな印象を受ける。

周溝の埋土は墳丘から流れ落ちた細かい暗黄～茶灰褐色土で、底面から埴輪片が多数出土した他、東南隅で蓋をして並べた状態(第21図)の須恵器と埴輪が出土した。

埴輪は周溝や墳丘に据えられた状態ではなく、離れた位置の固体に接合関係が認められる点から、墳丘上で破片になったものが流れ落ちたとみるのが妥当であろう。

須恵器(第22図)は蓋をして正位置に置かれた坏(15・22)の他に土師器碗(26)に坏蓋(23)と坏身(24)を重ねたものがあるが、(25)のみは破砕した破片を集めたような状態で出土し、坏(7・8)に接するように埴輪が置かれている。また、須恵器を取り上げた跡には赤色の顔料が薄く散布する状態が観察され、周溝内に副葬品を安置するにあたっての祭祀的な行為とみられる。

この他に埴輪と同様に周溝の全域にわたって須恵器甕(27)の破片が出土しており、やはり墳丘上で破損した破片が転落した可能性が高い。

須恵器坏蓋(第22図15・17・19・21・23)は口径12.5～12.8cm、器高4.5～5.1cmで、(15・17・19)は胎土に回転ヘラ削りで薄墨状に流れた黒色溶解物を含む。坏身(第22図16・18・20・22・24・25)は口径10.5～11.5cm、器高4.2～5.0cmで、(24)以外は胎土に薄墨状に流れる黒色溶解物を含む点が共通している。また、(24)の受け部は意味は不明であるが、大半が意図的に打ち欠かされている。

これらの須恵器坏の中で蓋と身がセットで出土した(17・18)と別々に出土した(19・25)は、焼成時の色調変化や胎土からみて、坏身に蓋をして同時に焼成された可能性が高い。

このことは、蓋坏の使用形態は土器群の中で法量が合致する組み合わせで埋葬されるものが大半ではあるが、その中に焼成時のセット関係の継続がみられる点は、使用形態が混在する集落での使用等を経ることなく、生産・搬入から短時間で埋葬されたことを示していると考えられる。この点については、これらの土器に使用による磨滅が全く認められないことから十分に想定でき、古墳の築造時期を推定できる好資料とみられる。

須恵器甕(27)は底部の破片を遺失しているが、ほぼ全体が窺知できるまで復元ができた。体部の外面は細い平行叩き、内面は上半の同心円叩きをナデ消している。口縁部端部は断面が三角形を呈し、やはり断面三角形の突帯が巡らされているのが特徴である。

埴輪(第22図)は、須恵器坏(21・22)にはほぼ密着して底面からやや浮いた高さで出土したが、遺存状態が悪く、結東部のみを辛うじて十ごと取り上げたが、何らかの容器に入れて埋納された痕跡は入念に精査したが認められなかった。

埴輪(第23図)は特に周溝の山側部分でかたまっ て出土したが細片が多く、また風化も進行して

いたため接合できる個体が少ないため、全体の器形が窺えるものはない。

埴輪（第23図）は、何れも黒斑はみられないが軟質の焼成で、器形の種類としては円筒埴輪（28～36）、朝顔形埴輪（37～39）、人物埴輪（40）がある。円筒埴輪、朝顔形埴輪は口径25～28cm、底径19～24cmで、外面はタテ方向のハケ調整の後にタガを貼付し、ヨコ方向のハケ調整を加えている。タガはヨコナデで丁寧に仕上げてはならず、粘土紐を押しつけただけの低く簡略化されたものが多い。内面は押圧とナデ上げて成形されており、部分的にハケ調整がみられる。

人物埴輪（40）は棒状の粘土を押圧で成形したもので、人物埴輪の手の可能性が考えられる。

これらの埴輪は大半が周溝の底面近くでかたまって出土したことから、墳丘上で破損したものが周溝が埋没する早い段階で堆積したとみられるが、個体数からみた破片の量から推定すれば大半は消失した墳丘北側に流れ落ちたと考えられる。

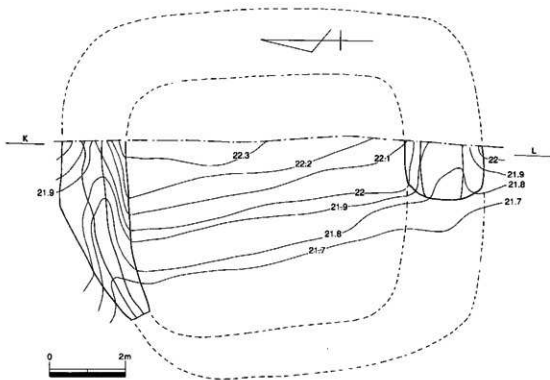
（4）4号墳（第24図）

4号墳は調査区の東端の斜面最上部に位置し、果樹園の階段状の削平面に辛うじて周溝断面が確認され、その存在が明らかになった。

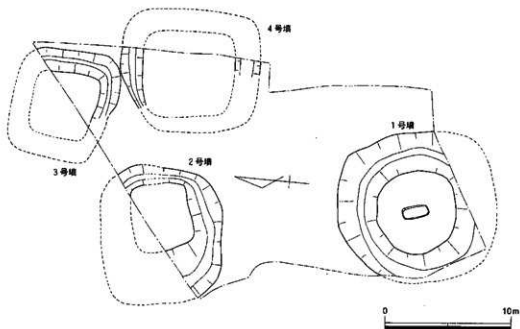
本墳の遺存状態は非常に悪く、墳丘の半分は調査区外に広がると推定される。また、1、2号墳と同様に大半の墳丘盛土が流失しており調査区上端の断面でも、埋葬主体部は確認できなかった。

本墳は地山に掘り込まれて遺存する周溝部分が僅かなため、全体の規模を推定するにはやや無理があるが、それを承知で推定するならば古墳の規模と形態は一辺8m程度の方墳と考えられる。

本墳に伴う遺物は、周溝の埋土中から埴輪の小片が出土したのみであり、具体的には言及できないが、墳丘の規模・形態や3号墳と切り合うことなく周溝を接する点からみて、ほぼ2・3号墳と同時期と考えて大過ないと考えられる。



第24図 小造山西古墳群4号墳平面図（S=1/100）



第25図 小造山西古墳群調査区内古墳配置図 (S=1/300)

第5節 まとめ

今回の発掘調査では、調査面積が約430㎡と丘陵部の調査としてはさほど広い面積ではないにも関わらず、小規模な古墳4基が密集する状況が明らかになった。

先ず古墳群の築造時期であるが、周溝から須恵器が供献された状態で出土した2、3号墳は須恵器の形態的特徴と法量が、陶器古窯跡群の光明池1号窯⁽¹⁾と一致することから5世紀末業段階に連続して築造されたと考えられ、埴輪の特徴や立地からみれば1・4号墳もほぼ同時期とみて大過ない。

また、折敷山古墳や小造山西古墳周辺の築造年代については、諸説あるが現時点では前者が5世紀第2四半期、後者が5世紀後葉にはほぼ比定⁽²⁾されている。

これに対し工業団地造成時に調査された雲上山11号墳も5世紀末葉の所産であることを併せて考えると、周辺の小規模古墳群は位置的には盟主的な大規模古墳に付属する陪塚のような在り方を示すものの、同時期に継続して築造されたのではなく時間を空けて形成されたことになる。

この点については、同一の政治勢力の墓域としてこの丘陵が認識され続けた結果とも推定されるが、今回の限定的な調査範囲と調査担当者の力量では、これ以上に古墳群の在り方については言及できず、類例の増加を待って検討したいと思う。

註

- (1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (2) 安川 満『造山第2号墳』岡山市教育委員会 2000

番号	道 場	器 種	器 形	法 量 (cm)			焼 成	新 土	備 考
				口 径	器 高	底 径			
1	小湫山西 1号埴	埴 輪	円 筒			15.5	青 滲	やや粗。0.5~4mm大の のり、れきを多量に 含む。	底部から上に約10cm残存。
2	小湫山西 1号埴	埴 輪	円 筒			15.5	青 滲	0.5~5mm前後の長石、 石英を多量に含む。	底部から上に約10cm残存。
3	小湫山西 1号埴残片	埴 輪	形 像				青 滲	粗。2~3mm大の砂粒 を多量に含む。	
4	小湫山西 1号埴残片	埴 輪	形 像				青 滲	粗。2~3mm大の砂粒 を多量に含む。	
5	小湫山西 1号埴残片	埴 輪	形 像				良 好	2mm大の砂粒を少量 含む。	
6	小湫山西 1号埴残片	埴 輪	形 像				青 滲	1~2mm大の砂粒を多 量に含む。	
7	小湫山西 1号埴家平	埴 輪	形 像				青 滲	2~3mm大の砂粒を多 量に含む。	
8	小湫山西 2号埴残片	須 恵 器	杯 蓋	125	4.1		良 好	1mm大の長石を少量 含む。	完品。
9	小湫山西 2号埴残片	須 恵 器	杯 蓋	122	4.6		良 好	砂粒ほとんど含まず。 表面自然風化が特徴。	完品。
10	小湫山西 2号埴残片	須 恵 器	杯 身	108	5.0		良 好	1mm以下の砂粒を少量 含む。風色剥離を含む。	完品。
11	小湫山西 2号埴残片	須 恵 器	杯 身	107	5.0		良 好	0.5mm以下の砂粒を微 量含む。	完品。
12	小湫山西 2号埴残片	須 恵 器	杯 身	108	4.2		良 好	0.5~2mm大の長石、 石英を少量含む。	完品。
13	小湫山西 2号埴残片	須 恵 器	變				良 好	砂粒ほとんど含まな い。	外側 平行タタキ。 内側 スリケン。
14	小湫山西 2号埴残片	須 恵 器	變				良 好	砂粒ほとんど含まな い。	外側 平行タタキ。 内側 スリケン。
15	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 蓋	125	4.5		良 好	風色剥離。1mm大の 長石を少量含む。	完品。
16	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 身	103	5.0		良 好	風色剥離少量。1mm 大の長石、微量含む。	完品。
17	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 蓋	126	4.5		良 好	風色剥離。1mm大の 長石を少量含む。	完品。
18	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 身	105	5.0		青 滲	風色剥離。1mm以下 の長石を少量含む。	完品。
19	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 蓋	128	4.8		良 好	風色剥離。1~2mm 大の長石を少量含む。	完品。
20	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 身	114	4.2		良 好	風色剥離。1mm大の 長石を少量含む。	完品。
21	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 蓋	122	4.6		良 好	0.5~2mm大の長石を 少量含む。	口縁部1/2欠損。他は残存。
22	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 身	108	4.8		良 好	風色剥離少量。0.5 ~1mm大の長石を中 量含む。	完品。
23	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 蓋	128	5.1		や や 不 良	1mm前後の長石、石英 を少量含む。	口縁部2/3欠損。他は残存。
24	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 身	114	4.8		不 良	1mm大の長石、石英を 少量。2mm大の長石も わずかに含む。	受け部分4/5を意図的に欠損。他は残存。
25	小湫山西 3号埴残片	須 恵 器	杯 身	115	5.0		良 好	1mm以下の風色剥離 を多量。長石を少量 含む。	口縁部の一部を欠損。他は残存。
26	小湫山西 3号埴残片	土 師 器	杯 身	120	(5.3)		不 良	1mm以下の長石、石英 を少量含む。	4/5残存。
27	小湫山西 3号埴残片	新 形 器	變	193			良 好	緻密。	口縁部から胴部にかけて残存。
28	小湫山西 3号埴残片	埴 輪	円 筒	(28.0)			青 滲	1mm大の砂粒を少量 含む。	口縁部1/6残存。
29	小湫山西 3号埴残片	埴 輪	円 筒	(24.8)			青 滲	1mm大の砂粒を少量 含む。	口縁部1/6残存。
30	小湫山西 3号埴残片	埴 輪	円 筒				青 滲	1~3mm大の長石、石 英を多量に含む。	胴部12×17cmの破片残存。
31	小湫山西 3号埴残片	埴 輪	円 筒				青 滲	1mm以下の砂粒を少量 含む。	胴部12×24cmの破片残存。
32	小湫山西 3号埴残片	埴 輪	円 筒			(23.0)	青 滲	1mm以下砂粒を少量 含む。	底部1/2残存。
33	小湫山西 3号埴残片	埴 輪	円 筒			19.0	青 滲	1mm大の長石を多量に 含む。	下部2/3残存。
34	小湫山西 3号埴残片	埴 輪	円 筒			(20.0)	良 好	1mm以下の砂粒を少量 含む。	下部1/2残存。

番号	道 碑	器 種	器 形	法貨 (cm)		地 域	胎 土	備 考
				口徑	器高			
35	小造山西 3号墳陶器	埴 輪	円 筒			(23.0)	普通	1mm以下の砂粒を少量含む。 底部1/4部残存。
36	小造山西 3号墳陶器	埴 輪	円 筒			(18.0)	普通	1mm以下の砂粒を少量含む。 底部1/4部残存。
37	小造山西 3号墳陶器	埴 輪	胴 圓形			(15.3)	良 好	0.5～2mm次の長さを少量含む。 下部2/3部残存。
38	小造山西 3号墳陶器	埴 輪	胴 圓形				良 好	1mm以下の砂粒を少量含む。 胴部6×20cmの破片残存。
39	小造山西 3号墳陶器	埴 輪	胴 圓形				普通	1mm以下の砂粒を少量含む。 胴部のみ1/2部残存。
40	小造山西 3号墳陶器	埴 輪	人 物				普通	1mm以下の砂粒を少量含む。 手？



1. 小山ヶ谷古墳調査前（南から）



2. 小山ヶ谷古墳竪穴式石室検出状態



1. 小山ヶ谷古墳全景（西から）



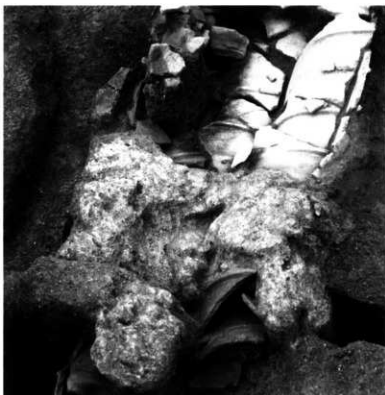
2. 小山ヶ谷古墳全景（東から）



1. 小山ヶ谷古墳埴輪棺(2)線刻



2. 小山ヶ谷古墳埴輪棺(1)線刻



3. 小山ヶ谷古墳埴輪棺被覆粘土



1. 小造山西古墳群調査前（西から）



2. 小造山西2・3号墳検出状態（西から）



1. 小造山西1号墳全景（西から）



2. 小造山西1号墳主体部



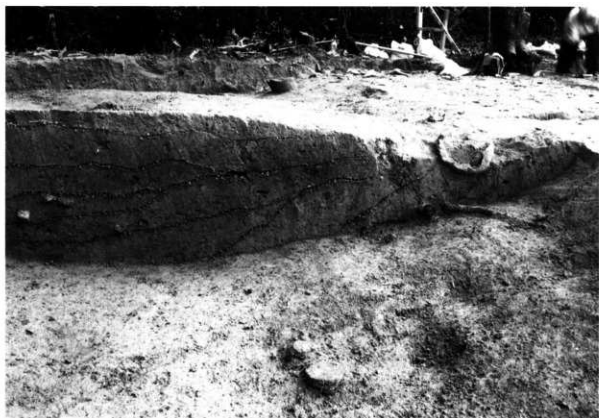
1. 小造山西2号墳全景（東から）



2. 小造山西3号墳全景（南から）



1. 小造山西4号墳周溝（西から）



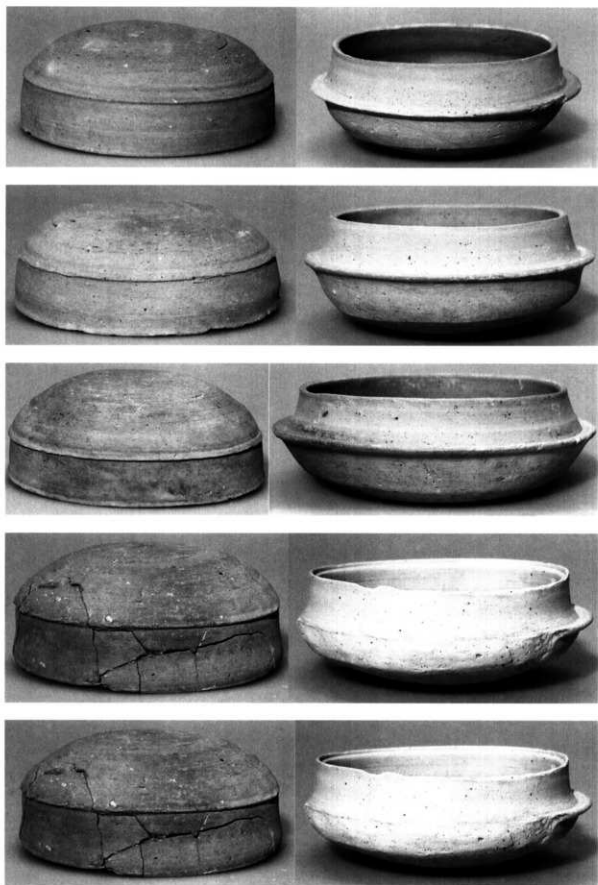
2. 小造山西1号墳埴輪出土状態（北から）



1. 小造山西 2 号墳周溝内遺物出土狀態



2. 小造山西 3 号墳周溝内遺物出土狀態

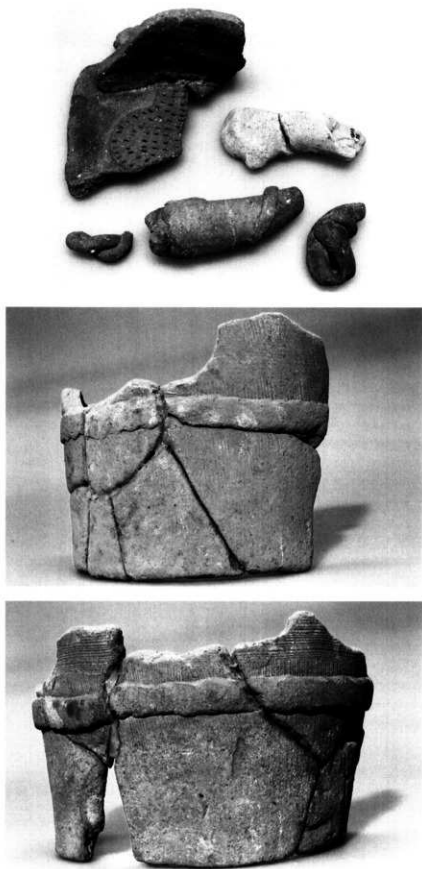


小造山西 3 号墳出土遺物

图版10



小造山西2号墳出土遺物(1)



小造山西2号墳出土遺物(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこく							
書名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告							
副書名	小山ケ谷古墳 小造山西古墳群							
巻次								
シリーズ名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	17							
編著者名	武田恭彰							
編集機関	総社市教育委員会							
所在地	〒719-1131 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL0866-92-8363							
発行機関	総社市教育委員会							
発行所在地	〒719-1131 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL0866-92-8363							
発行年月日	平成16年11月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おやまがひにこふん 小山ケ谷古墳	おやまけん 岡山県 そうじゃし 総社市	33-208		34° 40' 15"	133° 46' 25"	1997.8.8 ～18	200㎡	墓地造成
こずくりやまにしにふん 小造山西古墳群	みす 三須 あかはま 赤浜					2001.12. 15～25	400㎡	工場造成
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	建 物		特 記 事 項		
小山ケ谷古墳	古墳	古墳時代	墳丘・主体部	埴輪棺		古墳時代中期の特製埴輪棺を主体部とする古墳に竪穴式石室を増設している。		
小造山西古墳群	古墳	古墳時代	墳丘・主体部	埴輪・須恵器		大古墳の墳端に密集した小規模群集墳		

總社市埋藏文化財発掘調査報告 17

小山ヶ谷古墳
小造山古墳群

平成16 (2004) 年11月20日 印刷

平成16 (2004) 年12月20日 発行

編集発行 總社市教育委員会
總社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
總社市總社一丁目10番24号

